

『地獄』

作者 淺羽一

これでようやく終わらせられると、彼は両手首を縛られながらそう思った。
〈殺したがりマックミラン〉

いつの頃からかそんな二つ名で呼ばれたような我が身では、きつと天国なんて場所には行けっこないだろうと悟っていたものの、それでも彼は安堵した。どんな地獄も、彼が生きているこの国の現状に比べれば遙かにマシなものだろうと。

「歴史にすら残るような天才が、まさか歴史から抹消される裏切り者になるとはな」

寡黙であるべき拷問官にしては饒舌な男を一瞥して、それだけで彼は再び己の体へ視線を落とした。どうせこの国の歴史はもうじき幕を閉じるだろう、なんてそれこそ無意味な問答だ。敵を探す為に、敵を捕らえて拷問にかけ、そうして得られた情報を元に敵を見つけてまた拷問に――。無限に続くドミノ倒しじゃあるまいし、いずれは必ずそんな連鎖は終わるのだ。にも関わらず、何度も同じことを繰り返した挙げ句、今もこうして新たな「敵」を水で濡らした荒縄で吊している国は、最早すでに自家中毒の末期なのだろう。

「しかし、まさかあんたが敵に寝返っていたとは。道理でいつまで経っても肝心な情報が得られないわけだ」

一体、この男が、いや、かつての彼も含めたこの国の人間達が求めている「敵」とは、そもそも何処で何をしている誰であったのだろうか。蜘蛛の巣じみた近隣諸国との関係図の中、何年も何十年もの間ずっと前進も後退もしない静かな戦争は、つまり見方を変えればある種の平和と呼べそうなのに。

良いじゃないかと、彼は宙に浮いた足の先を見下ろしつつ思った。喩えそれが欺瞞に満ちた安寧であったとしても、受け入れられればそれは即ち「平和」なのだ。汚れを嫌うだけでは飽きたらず、汚れに触れたかも知れない自分自身ごと削ぎ落としてしまうような潔癖さは、詰まるところ酷く長い時間を掛けた自殺と変わらない。

風に揺らされる蓑虫さながらに不安定な体が意志を無視して震える度に、固い荒縄がぎしぎしぎしぎしと手首を噛む。しばらくすると覆面の上からでも嬉々とした表情の見えそうな男が、ごつごつとした石畳の上を引きずって溶岩色の鉄板を運んでくる。やがて体の真下へと設置された分厚い鉄板は、そこから立ち上る熱気に反して体中に冷や汗をにじませる。〈山猿の舞踊〉。そう名付けたのは他の誰でもない彼自身だった。熱した鉄板の上に裸足で吊した人間をぶら下げ、適当な間隔でその体を落としては引き上げ、また落とす。熱さを超えた激痛のあまり、泣くことすら出来ず獣の鳴き声じみた奇声を発して必死に跳ねる姿は、まさしく醜い山猿そのものだ。焦げた足の裏の皮膚が鉄板に張り付き、自らの力でそれを剥ぎ取り、室内には悲鳴と共に血と肉の焦げる音が響き渡る。しかも、熟練の拷問官の技術はショックで死ぬことすらも許さない。まさしく地獄絵図。それはマスクをしていても容赦なく鼻腔に突き刺さる臭気も合わさり、端から眺めさせているだけでも常人であればその精神を破壊する。なるほど、大した拷問だ。我ながらよくもまあこんなもの考えたなど、彼はかつての自分を皮肉った。それはまだ彼が〈殺したがりマックミラン〉と呼ばれるより遙か前のことだった。

他にも、彼は数々の拷問器具や方法を生み出した。そしてそれらはすべからず対象の口を割らせる為に有効であり、かつその精神のみならず肉体までも徹底的に破壊するものだった。どうせ最後には皆死ぬのだ。ならば対象の体を無傷に保つ必要なんて無い。むしろ、得るべき情報が得られた後であれば生かしておく必要こそ無い。裏切り者は全て死刑。国

の敵は必ず処刑。拷問に掛けられるような人間は、即ちその時点で間もなく死ぬことが決定されている存在なのだ。

「簡単には死なせないぞ。必ず敵の情報を全て吐かせてやるからな」

果たして、その男にとって真の目的はどちらなのか。前者か、はたまた後者か。考えずとも分かる、彼は言うなれば昆虫の羽や足を順にもいでいく子供なのだ。隠された事実を暴く為なんて言うことは建前に過ぎない。そして、手段と目的を取り違えた拷問官ほど質の悪いものはない。けれど、そんな男だからこそこんな国の拷問官としては他の誰よりも相応しい。それは例えば、次から次へとあつという間に「情報」を引き出し、いとも容易く殺してしまふ、マックミランのような人間よりも。

「それじゃあ、まずは五秒から」

男がそう言った直後、彼の意識から手首の痛みが一瞬だけ消え、直後に足を錆びた鉄杭で貫かれたかのごとき衝撃が走った。

あまりの激痛に、体が本能的に救いを求めて必死に踊る。痙攣する横隔膜は命乞いどころかまともな悲鳴さえ許さず、気を抜ければ呼吸すらままならなくなる。つり上げられたままの手首の縄は、絶妙なたるみ具合で宙に逃がれることを許さない。傍らで数えられる一秒一秒が、研ぎ澄まされすぎた神経のせいか或いは拷問官のさじ加減のせいか、やたらに長く感じられて、たった五秒がともすれば永遠のごとく感じられる。

バシヤンと冷水を叩き付けるように浴びせられて我に返れば、彼の体はいつの間にか再び宙に浮いていて、足の下からは凄まじい音と共に白い蒸気が上がっていた。

「さて、少しは吐く気になったか」

定型文をただ繰り返している風な調子で男が問う。だから彼は率直に返した。

「：敵なんて、私たちが望む敵なんて、いやしないんだよ」

途端に男の全身から嬉しそうな気配が溢れた。

「強情な奴だ」。そして男は冷えた鉄板をどかし、また新たな鉄板を運んでくる。見慣れたはずの鈍色鈍色が、いつそ今にも溶け出しそうなくらいに光って見えた。

一体、何と答えれば男は満足するのだろうか。誰の名を告げれば男は納得するのだろうか。いつそこの眼前にいる男自身の名前を当てればどうか。今はまだ無名でも、いずれは顔を隠していても無意味なほどに有名になる未来を望んでいるらしい拷問官は、その時どんな反応をするのだろうか。己の役目に対して忠実にそれを自白と認めるのか。それとも都合良く虚実を選別し残酷な遊戯を続けるのか。

「次はさっきの倍の十秒だ。まだまだ時間はたっぷりあるぞ」

舌なめずりさえ聞こえてきそうな男の言葉に、彼はほんの一瞬、痛みも忘れて苦笑した。「：お前では、永遠に続けても真の敵など見つけられんよ」

「ならば試してみよう」

急速に冷えた声が鼓膜を刺すと同時、彼は再び無間地獄へ落ちていった。

〈了〉